

橋木俊詔・迫田さやか『夫婦格差社会—二極化する結婚のかたち』（中公新書2013年）

「夫の収入が低ければ妻が家計補助のために働き、夫の収入が高ければ妻は働かないので、妻の収入は世帯間の収入格差を縮小する役割を果たす」、これは昔の話で、現在では、妻は夫の収入に関係なく、働くかどうかを選択しているのではないか。その場合、夫も高所得、妻も高所得の夫婦と夫が低所得で妻が働かない夫婦がそれぞれ存在することになり、世帯によって大きな収入格差が生じる。このことが日本社会の格差拡大の一因になっているのではないか。この問題意識が、本書の出発点となっている。『夫婦格差社会』と題されているが、夫と妻の間の格差を論じたものではなく、日本社会における格差問題を夫の収入だけでなく、妻の収入も視野に入れ、経済学と社会学の手法を用いて、わかりやすく新書版で提示しようというねらいである。

第1章では上記の問題意識に基づいて、「夫の所得が高ければ妻は働かない」という「ダグラス・有沢の第2法則」が崩れつつあり、夫と妻がそれぞれ高収入、低収入、無収入の組み合わせがいずれも少なくない比率で存在することを年齢、学歴、職業属性データとともに提示している。

第2章では男女の結婚選択がどのような動機で進み、どのような組み合わせが生まれるかを大学間格差を含む学歴格差を中心に分析している。

第3章では夫婦とも高収入のパワーカップルの典型として、医師夫婦、法曹夫婦などの実態を紹介し、一方、夫婦とも収入の少ないウィークカップルは男性が非正規労働者で低学歴のケースが多いことを示している。

第4章では既婚世帯の格差問題を論じる以前の問題として、経済的要因で結婚できない若者が増加し、結婚をめぐる格差問題があることを示している。

第5章では離婚率が増加しており、その結果、一人親家庭が増えて、貧困世帯となっているケースが多いという、離婚が生み出す格差問題について論じている。

第6章では都市部と地方部で既婚率と妻の就業率に大きな違いがみられ、本書で論じている問題が地域によって違いがあることを示している。

本書を読み進んでいくと気になる点も少なくない。パワーカップルの高収入、高学歴の実態記述が詳細すぎる一方で、ウィークカップル＝低収入の夫と無業の妻の組み合わせはなぜ生まれるのかについては詳細な分析が示されていない。また結婚できない理由や離婚理由については非経済的要因の分析が長かったり、結婚のアドバイスが書かれていたり本筋でないと思われる記述がみられる。

とはいえ、本書はデータを豊富に用いて、日本における夫婦構成の実態を多様な角度から示している。著者は、日本社会における格差問題の解決の糸口を探ろうとする視点から分析しているので、提示されている政策提言も積極的なものである。本書を読むことで結婚や夫婦という視点から格差問題を改めて考えることができるだろう。（滝口哲史）